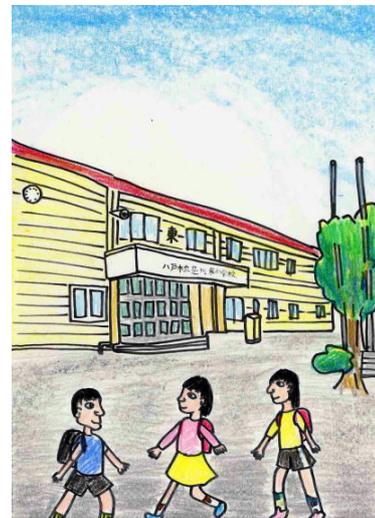


平成20年度 学校飼育動物に係るフォーラム 実践発表

「いのちを大切にする心をはぐくむ教育活動を柱とした特色ある学校づくり」

- いのちをつなげ！ひがしっ子サポーター -



平成20年7月28日（月）

八戸市立是川東小学校

「いのちを大切にすることをはぐくむ教育活動を柱とした特色ある学校づくり」

- いのちをつなげ！ひがしっ子サポーター -

八戸市立是川東小学校 嶋 守 由 紀

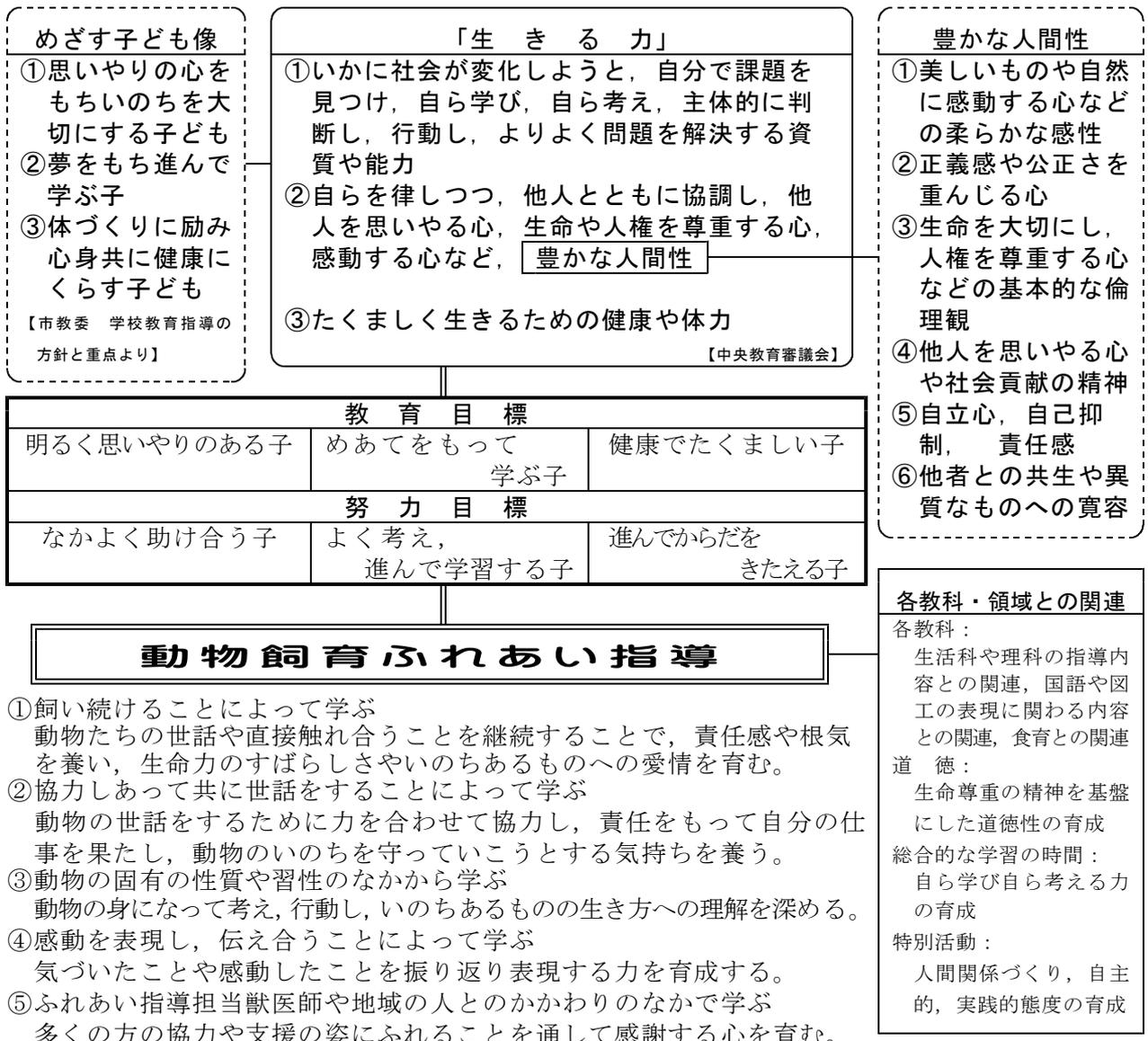
1 はじめに

本校は、児童数11名、県道久慈街道を八戸公園から南へ約4km、階上町に接する位置にあります。学校裏の林に保護者の手によって整備された遊歩道「かもしかライン」があり、林をぬけた高台から新井田川鷹ノ巣溪流が一望できます。隣接した「ひがしっ子農園」を活用した栽培活動に継続して取り組むなど、豊かな自然環境に包まれた学校です。

明治28年創立。113年の伝統ある学校の歴史や文化、地域への愛着を深め、地域と共に心の通い合う学校づくりに取り組んでいます。

動物飼育への取り組みについては、7年間飼育を継続してきたうさぎの「バニー」が昨年8月1日に亡くなり、2学期から三八地区獣医師会から貸与されたうさぎ（ロップイヤー、雌）の飼育活動を始めました。本フォーラムでは、長年愛着をもって飼育してきたうさぎの死への対応と、新しいうさぎとの出会いを中心に、左近允美紀先生（あおば動物病院）の支援を受けた動物飼育ふれあい指導の実践について述べていくこととします。

2 「動物飼育ふれあい指導」のねらい



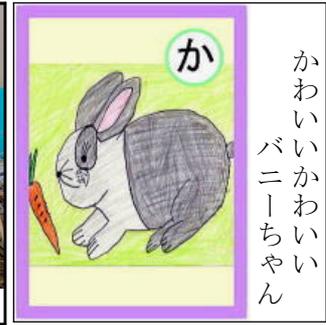
3 本校における動物飼育ふれあい指導の実践

(1) うさぎの「バニー」の死に直面した時の指導について

平成19年度、2名の1年生を迎え、全校飼育活動の中で1年生にもうさぎへの接し方を上級生が教えることを重視していく。1年生の1名（特別支援学級在籍児童）は、入学まで動物に触れることに対して恐怖感があったのか、保護者の話では初めてうさぎに接するようになったとのこと。保護者の喜びが家庭でのうさぎの飼育につながっていく。おとなしい「バニー」の存在が大きかった。



在りし日のバニー



全校飼育活動を継続するが、食欲低下やしゃっくりのような普段と異なる様子があり、心配されることが多くなる。たびたび左近允先生に相談するが、夏休みに入り食べる量や飲む量が極端に減り、診察をお願いする。超音波診断の結果、子宮に腫瘍の疑いがあり、点滴で様子を見ることになる。食欲は依然として戻らず、8月1日朝、職員が出勤した時には亡くなっていた。まだ体温は残っていたが、体が硬くなり、体温もどんどん下がっていった。

左近允先生に報告と事後の対応について相談。夏休み中ではあったが、子どもたちに「バニー」の死と対面させ、いのちには限りがあることを実感させ、「バニー」に感謝の気持ちをもってお別れをさせることを大切にしていくこととする。

埋葬については左近允先生との話し合いから、校庭の一角に埋葬していくことにした。

「バニー」とのお別れの会

8月2日 参加児童12名中11名（1名は都合により欠席）

保護者も見守る中、それぞれが家の庭先から花などをもち寄ってお別れ会を実施する。

- ・登校し、「バニー」の亡骸と対面する。死後硬直はとけたが体温が感じられないことややすらかに眠ったようによこたわる「バニー」に直接触れて感じたり、話しかけたりして「バニー」の死を感じ取る。
- ・教頭先生、養護助教諭の先生から「バニー」の様子の変化や左近允先生の診断の結果、「バニー」の死に接したときの気持ちを子どもたちに説明する。
- ・動物飼育担当がお別れ会のねらいについて説明する。
- ・「バニー」への最後の手紙を書く。
- ・「バニー」に向けて手紙を読む。
- ・みんなが書いた手紙も一緒に「バニー」を埋葬し最後のお別れをする。
- ・校長先生から「いのち」についての講話をしてもらい、私たちの心の中に「バニー」が生き続けていることを確認し合う。

【指導に当たって留意したこと】

- ・左近允先生の指導を大切にしました。
- ・バニーの死について子どもたちには非がないことや、皆で世話をした結果バニーの命が長くなったことに着目させた。
- ・思い出を作文にしたりお別れの言葉を声に出したりすることでみんなで悲しみを共有し、バニーを忘れないという気持ちを大切にしました。



眠っているような「バニー」



「バニー」への想いを綴る



悲しみをこらえ別れの言葉を伝える子どもたち



いつまでも見守っていてね さようなら

【八戸市小学校音楽祭にトーンチャイム奏で出演する】

「バンニーへ～千の風になって」と題して、バンニーのことを想いながら演奏する。

演奏の前に3年生の代表の子どもたちのナレーションでバンニーとの思い出を取り入れ、いつまでも忘れないという想いを伝えるための演奏を行った。



(2)「ラブ（ロッピーヤー）」の飼育活動を通して

①ロッピーヤーの転入生が本校にやってくるまで

ロッピーヤーの貸与にかかる情報が、夏休み中の動物飼育ふれあい指導担当者研修会で入る。職員で協議し、子どもたちの意見を聞こうということになり、夏休み学習相談日に登校していた子どもたちと話し合い、八戸市総合教育センターに応募する。

②うさぎがやってきた

ア. 伝達式を左近允先生の指導のもと実施する。

品種、性別、飼育の要点などの説明。まだ生後間もないということで子どもたちに抱いてもらう活動は次回のふれあい指導までお預けとする。

イ. 名前を決めよう。

子どもたちの考えた名前から名前を決める。12通りの名前から子どもたちと職員で話し合い名前を決める。「ミミちゃん」「うさこちゃん」「ロッピーー」などよく考えられた名前の中から、子どもたちが決めた名前は「ラブ」に決定した。

ウ. 飼育当番はどうする？

玄関前での飼育を継続することになったが、朝の飼育ケージの清掃や餌・水の補充はどうするか話し合う。学級ごとに1週間交替で世話をすることになる。全校の子どもが、継続して飼育にかかわることを大切にするようにした。(現在は縦割り班活動)

エ. 休みの日の世話はどうしよう？

職員が担当することにして対応。適切な飼育環境という面では課題が残る。長期休業中は、子どもたちを4班編制にして飼育当番活動を行うことに話し合いで決定する。

オ. 「ラブ」の絵を描こう。

子どもたちと学級担任の声から絵を描こうということになり図工の時間を活用する。左近允先生や獣医師会のみなさんにもお手紙を届けたいということにもなり、表現活動につながる。

カ. 左近允先生とのふれあい指導

初めて抱いた「ラブ」の感触に子どもたちの瞳が輝く。

「ラブ」のしぐさからうさぎの気持ちを学ぶ。

「ラブ」の餌やりや飼育方法について理解を深める。

「ラブ」はペットではなく、子どもたち一人一人の仲間として大切に接していきたいという気持ちを持つことができた。



※ 左近允先生からやさしく声がけすることが大切だよという指導を受け、子どもたちの行動に変化が・・・。

登校時、「ラブ、おはよう」。下校時「バイバイ、ラブちゃん」「さよなら、ラブ」などの声がけが自然に子どもたちから出るようになる。

ラブの様子をみながらやさしくなでてあげたり、話しかけたりする姿が毎日見られるようになる。

また、日中は「ラブ」は休息の時間だということを考えて、授業間の休み時間に無理に遊びにさそったり抱いたりするようなおもちゃ扱いはいっさいなくなる。

「ラブ」の気持ちを考えた行動が子どもたちの中から芽生えてきた。



登下校時のふれあい

キ. 「ラブ」の家を住みよいものにできないだろうか？

校内のケージでの飼育となるため、どうしても活動範囲が限られてしまう。「ラブ」にとって窮屈な環境かもしれないという意見から、ケージを2つ組み合わせリフォームする。

ク. 外での遊びもさせたいな。

左近允先生から「外での活動もさせてください。」との指導があったため、PTA会長さんとも相談し、校庭のビニールハウスの骨組みを利用し、「ラブ」の外遊び用の囲いを設置する。暖かい日の昼休みに子どもたちと外遊びでリフレッシュすることにした。

最初は囲いの中で「ラブ」を追いかけて回していた子どもたちだったが、「追いかけて回したらかわいそう」「好きなようにさせてあげよう」という意見が出て、子どもたちは囲いの外から見物。ものすごい速さで跳んだり跳ねたりの「ラブ」に歓声をあげた。



ケ. 小中野小学校にお手紙を出そう。

三八獣医師会より貸与を受けたうさぎの兄弟が小中野小学校に贈られたということから、小中野小学校にお手紙を出したいということになり、1年生と3年生がお手紙を書く。今後、小規模校の本校としては、様々な形で交流活動も視野に入れて指導を進めていきたいと考えている。

【朝の活動の様子】

- ・毎日の世話はたいへんだけど、「ラブ」が気持ちのよい部屋で過ごすためにがんばるぞ。
- ・うんちやおしっこ世話だってがんばらないといけないんだ。みんなで協力しててきばき仕事をしよう。
- ・おしっこの色はどうか？うんちはちゃんとでてるかな？水の量は？など「ラブ」の健康状態を確認するのもこの時間。何かあったら先生へ報告。飼育日誌への取り組みも継続中。



【全校朝会に「ラブ」も参加】

- ・全校朝会の本の読み聞かせの時に「ラブ」も一緒に参加。子どもたちもちょっとうれしそう。「ラブ」はりっぱなひがしっ子の仲間、一員です。

【「ラブ」にも結婚式ができるかな？】

- ・「ラブ」も繁殖可能な時期になり、左近允先生との相談や子どもたちへの説明と話し合いを継続中。



5 成果と課題

(1) 成果

①飼い続けることによって学んだこと

- ・小規模校のよさを生かし、全員が飼育活動にかかわり、直接動物と触れ合うことを通して、動物に対する愛情を育み、間接体験では学ぶことのできない体験をすることができた。飼育を継続することで、いのちあるものへの責任感を養うことができたと考えられる。
- ・バニーを長年飼育し続け、そのいのちの最後としっかり向き合うことを通して、いのちの重さや大切さを実感させることができた。

②協力しあって共に世話をすることによって学んだこと

- ・学級単位で飼育当番活動を協力して行うことを通して、約束を破ったり、自分勝手な行動をすれば、級友も動物も困るということに気付いたり、動物のためになることを話し合ったりすることができ、他者への思いやりの心を育てていくことにつながった。

③動物の固有の性質や習性のなかから学んだこと

- ・排泄物の処理も含め、「誕生—成長—繁殖—病気—死」といった生命の循環を知った。また、繁殖行為をとおして、命あるものの生き方への理解を深めることができた。
- ・うさぎの習性を理解し、うさぎのしぐさや行動の意味を知ることによって、うさぎの身になってものごとを考える素地が養われたことが、子どもたちの接し方から明らかとなった。

④感動を表現し、伝え合うことによって学んだこと

- ・絵や作文、手紙、音楽などさまざまな表現の機会を通して、教科の学習との関連を図りながら、本校の課題である表現力の育成の手立てとして活動を広げることができた。

⑤ふれあい指導担当獣医師や地域の人とのかかわりのなかで学んだこと

- ・左近允先生との連携、協力が最大の力である。子どもたちは、左近允先生が指導くださったことに感謝の心をもって努力して実行していた。今後も連携を進めていきたい。
- ・地域の人々から「ラブ」のえさ（野菜）の提供が度々あり、学校の特色ある事業への取り組みに対して協力が図られた。

(2) 課題

- ・教科との関連を図るよう努めてきたが、年間指導計画に位置づけたり、トピック的に道徳の教材との関連を図ったりなどの取り組みが必要である。
- ・動物飼育は動物がより過ごしやすく健康で生活できるようにする取り組みである。現状に満足することなく、愛情をもって飼育活動に取り組んでいく必要がある。